

# オクタヴィア・ヒルの住居管理とヴィクトリア時代の住宅問題

出島 有紀子

キーワード：イギリス、ヴィクトリア時代、住宅史、女性史、福祉史

## はじめに

労働者たちに、より良い賃金にふさわしい人間になってもらおう、そして適切な賃金を要求してもらおう。仕事が豊富な場所に行き、需要のある仕事を選んでほしい。住居提供のような形であれ何であれ、賃金を補完するような形で税金を使った補助金を受け取らせてはならない。<sup>1</sup>

1883年12月にオクタヴィア・ヒル(1838-1912)は『ナインティーンズ・センチュリー』誌上で上記のように唱えた。イギリス国内で労働者階級の住宅問題をめぐる論争が頂点に達していた時期である。ヒルの指針は常に「当事者自身にやってもらおう」であり、「彼らのために何かをしてあげよう」ではなかった。

住居改良運動家として知られていたオクタヴィア・ヒルは、ロンドンの過密した貧困地域に暮らす人々に居住生活の改善を指導したことを筆頭に、ナショナル・トラストの創立を含む多様な慈善活動を行った。ヒルには、当時さかんに討論されていた住宅問題を解決できるのは個人レベルでの自発的な行動のみであるという確信があった。そのため彼女は19世紀末に本格的に導入され始めた公営住宅には強く反対した。長らくヒルの立場は時代遅れの主張として退けられてきたが、ヒルが貫いたような姿勢はイングランドの福祉制度においてこれまでずっと重要な役割を果たし続けてきたと言えるのではないだろうか。本稿の目的は、ヒルの住居管理を考察しながら、ヴィクトリア時代に議論された労働者階級の住宅問題とは何だったのかを明らかにすることである。住宅問題の議論の中心は、窮乏や過密ではなく、労働者の経済的かつ社会的な自立にあった。

## 1. 借家人たちの経済的自立

オクタヴィア・ヒルが目指していたのは、独自の手法による住居管理、つまり家主とし

ての借家人に対する生活指導であり、「最下層」の人々の自立だった。慈善や行政に依存することなく、自らの労働によって経済的に自立する人間に育てようとしたのである。経済的自立に向け、まず必要だったのは定職に就くための訓練だった。この時代、貧しい者が職を得るための職業訓練を試みたのはヒルだけではない。職業訓練校や更生施設が多数存在していたし、救貧委員は講座を開いて大工、パン焼き、敷物製作等の技術を教えていた<sup>2</sup>。貧しい人々の中でも高齢者は定職を見つけることが困難だったし、若者でも訓練期間中は貧困生活に耐えなければならないことが多かった。しかしヒルは早くも住居管理に着手してから4年後の1869年に、彼女の指導していた年長の娘たちは「家事使用人として働いているか、家事使用人の職に就く準備ができている」と発言している<sup>3</sup>。速いペースではと言えないまでも着実に、ヒルは貧しい家族の子供たちに、自立が可能なほどの生計を立てる手段を提供したのである。

雇用機会の提供のほか、ヒルは労働者の自立のために独特な計画を実行した。彼女の管理する住宅の借家人は主として日雇い労働者だったため、失業中は窮乏状態が深刻だった。週ごとの家賃を遅滞なく払わせることがヒルの方針であったが、それを実行することに彼女は成功していた<sup>4</sup>。このことは、ヒルの前の家主のもとでは同じ集合住宅で7、8週間の家賃滞納が多かったことを考えれば驚くべきことであつた<sup>5</sup>。どのようにしてヒルは家賃滞納を無くすことを可能にしたのだろうか。第一の方法は、借家人から家賃以外に貯金も集めたことである。各世帯に非公式の通帳を持たせ、ヒルと協力者の家賃回収者たちは借家人を対象に銀行業務を行っていた。「彼ら〔借家人〕は将来を見通す力に不思議なほど欠けている」とヒルは嘆き、日雇い労働者たちが雇用の減少する時期に備えて収入を蓄えておくことがほとんどないことを示唆している<sup>6</sup>。毎週土曜日の晩になると、ヒルは自分の管理する住宅の共用部屋で借家人が貯金を持ってくるのを待った。中にはただ単にヒルと雑談をするためにこの部屋に寄る人々もいた<sup>7</sup>。このような方法で、ヒルは冬になる前に借家人たちに「多少の金額を貯めさせ」、収入が減少する時期を乗り越えることを可能にしたのである<sup>8</sup>。

ヒルが家賃の滞納を防止した第二の方法は、雇用機会の少ない時期に家主自ら借家人を雇うことだった。「雇用の減る時期に備えて、私は彼らができそうな仕事はなんでも慎重にとっておくようにしていた」とヒルは語っている<sup>9</sup>。ヒルが借家人に提供した仕事は主に彼ら自身の集合住宅の修繕や清掃だった。壁のしっくい塗りやペンキ塗り、窓ガラスの取り付け、廃棄物の撤去、共用通路や階段の掃き掃除等である。こうした仕事をした者には、借家人たち自身から集めた家賃による収益を使って賃金が支払われた<sup>10</sup>。つまり家主自身の出費による支払いではなかったため、これは借家人たちが他人からの施し金に依存していないことを意味した。

借家人の他者への依存を防止する三番目の方法は、毎週遅れずに家賃を払ったことに対して報償金を与えることだった。管理する住宅を修繕し、税金を払い、住宅経営を支える出資者に5パーセントの利潤を支払ってもなお、余剰金は常にあった。なぜなら、ヒル

は近隣の相場に合わせて家賃の金額を決めており、近隣の家主たちは莫大な額の滞納を埋め合わせるために家賃をどんどん上げていたからである<sup>11</sup>。このような余剰金から、ヒルは毎週遅れることなく家賃を納めている借家人たちに払い戻しを行っていた。ささやかな金額ではあったが<sup>12</sup>、収入を得ること自体が極めて困難な時期にはこれも借家人たちの自立の支えとなったにちがいない。

## 2. 金銭的支援への反対

生活の糧を自ら稼いで得るように借家人を導いた一方で、ヒルは慈善であれ公的福祉サービスであれ貧しい者に金銭あるいは物品の支援を与えてはならないという信念の普及を重視していた。見境のない施しのもたらす害は「慈善組織化協会」によって根強く叫ばれており、ヒルはこの団体の主要メンバーでもあった。慈善と称して金銭、食糧、毛布、石炭や、こうした生活必需品の配給チケットを無作為にばら撒くことは、人々に自立の努力を放棄して他人からの気まぐれな支援に依存させることになると考えられた。同様に、中央および地方政府による支援も、無料あるいは税金からの補助によって割引かれた金額で提供される住宅や給食に依存させることで、貧しい人々の自立の妨げになると思われた。生活必需品を無料あるいは市場価格よりも安価で提供するような公的事業のほぼすべてにヒルは強く反対した。ヒルは1885年の「労働者階級の住宅に関する王立委員会」で、税金を使って生活必需品を安価で提供するようないかなる事業も問題の解決にはつながらないと発言し、そのような事業は「旧救貧法と同じく単に賃金の税金による補完になるだけ」と述べた<sup>13</sup>。旧救貧法に言及することで、彼女は王立委員会に院外救済制度の失敗を思い出させた。旧救貧法の院外救済は、経済的自立に向けた努力を放棄した大勢の人々を支えるために納税者に過大な負担を課したのである<sup>14</sup>。ヒルにとって、補助金によって割引された住宅の提供は、税金を使った不正に安価な住宅の提供であり、真面目に働いて納税する人々に余分な支出を強要するものにほかならなかった。

## 3. 政府の役割に関するヒルの考え

税金を使った安価な住宅提供に反対する一方で、ヒルは政府に別の役割を期待した。個人や民間団体には代替不可能な政府の役割は、第一に立法である<sup>15</sup>。ヒルが雑誌に書いた論文の幾つかは、英国議会で審議中の法案への世論の支持を獲得する目的で特別に書かれたものであった<sup>16</sup>。政府の機能は「必要とされる仕事を[政府自らが]行うことではなく、そのような仕事が行なわれることを妨害するような困難や障壁を取り除くこと」であると信じられていたこの時代<sup>17</sup>、中央政府は立法によって物事を禁止したり適当な機関に権限を付与したりすることに役割を限定することを期待されていた。一連の公衆衛生法（1874年、1875年、1890年）によって望ましくないとみなされた居住形態が次々に禁止され

てゆくと、ヒルは地下居住や住宅の裏庭への住宅建設や埋葬地の住宅地化も禁止するためにさらに多くの条項を追加すべきだと主張した<sup>18</sup>。「職人および労働者住宅法」(1868年, 1875年, 1879年, 1882年, 1885年, 1890年)も同様に修正法が次々と公布され、徐々に地方政府に貧民街を撤去する権限を付与していくことになった。

法律を制定することが中央政府の主な役割だったとすれば<sup>19</sup>、法の施行は地方政府の責任だった。ヒルは「市場主義の方針にもとる」ことになるがと渋々認めつつも、地方政府に個人や民間団体が提供できるものを一切提供しないという条件付きで、衛生改革と貧民街撤去に乗り出すよう求めた<sup>20</sup>。1880年代以前の衛生法や住宅法はヒルの考えを共有する人々の意見を反映していたと言える。これらの法律は住宅問題に介入する地方政府の権限を拡大した。公衆衛生法のもとでは、衛生視察官や保健医務官を任命して不潔な居住形態を規制することは地方政府の管轄であった。トレンズ法とクロス法としてそれぞれ知られる1868年と1875年の職人住宅法、および1879年の両法それぞれの修正法によって、地方政府に人間の居住にふさわしくない集合住宅の家主に改善を要求する権限が与えられた。家主がこれに応じることを拒否した場合、地方政府は対象の集合住宅を買い上げて取り壊すことができた。残った土地はその後民間の住宅金融組合に売却され、住宅金融組合が労働者階級のための住宅を建設しなくてはならないことになっていた。一連の法律は、土地所有者の権限への侵害を慎重に回避していたため、地方当局は家主に集合住宅の撤去や改築を強制することはできなかったのである。これらの法律は自由市場原則の維持を意図していたことから、地方当局自身が住宅を建設したり所有したりすることもできなかった<sup>21</sup>。財産所有への関与は一切許されなかった地方政府の役割は、住宅の取り壊しや道路の拡張といった利益を生みにくい業務に限られた。

地方当局が衛生法や住宅法のもとで住宅問題に介入する権限を与えられたとはいえ、法の施行は義務ではなく任意であった。たとえばトレンズ法の場合、法の施行は教区役員や地区委員の手に委ねられており<sup>22</sup>、教区の地方税納付者が同意するまでは地方当局が行動を起こすことはできなかった。これは非効率的ではあったが、地方税納付者の善意が自発的に高まって法律が施行されるようになるまで待つことが重視されていたのである。法律を全国一斉に施行するのではなく、各教区の市民がその法律の必要性を認識したときに初めてそれぞれ施行するほうが好ましいとされていた。このように自発的行動を重視したことは、「職人および労働者住宅法」の失敗の主因であったと考えられてきた。「自由放任型の権力から強制的な権力へ」の移行を重視する「ヴィクトリア朝社会福祉国家の発展」の構図を描こうとしてきた歴史学者たちは、上記のような自由放任型の法律の無効性を非難してきた<sup>23</sup>。自由放任型の法律の欠点を強制的な法律の必要性が未だ認識されていなかった時代の産物であったと説明するのは簡単だ。しかし、そうした自由放任型の法律の中に、ヴィクトリア時代中期の人々がいかに真剣に市民の善意を信じて自由意志を尊重していたかを見出すこともまた可能であろう。職人および労働者住宅法の施行が不十分であったことはオクタヴィア・ヒルも認識していた<sup>24</sup>。しかし彼女は自発的な行動に期待していたそ

の他の人々と共に、強制的な権力に頼る代わりに個々人の善意に訴え続けた。

しかしながら地方政府の役割の定義は不変ではなかった。地方政府が自由市場にどの程度の介入を許されるのかはそれまでも長年さかんに議論されてきた主題であったし、介入の増加に好意的な意見が目立つようになった時期でも、ヒルや彼女に同調する者たちは政府の介入は人々から自立の意志を奪うもののだとしてこれに反対する声を挙げた。税金で補助された安価な公営住宅の提供を早くも 1880 年代初頭に提案した有力な主唱者の一人は、皮肉なことに保守党の党首であった。ソールズベリ卿が住宅問題の応急措置として国家予算を使った財政支援を提案したとき<sup>25</sup>、保守党党首の彼は与野党双方から厳しく批判された。1883 年 11 月に発表された論文「労働者と職人の住宅」において、ソールズベリは過密居住の害悪を「英国議会自身によって作られた」ものであるとして、政府による住宅提供への資金援助を正当なものであると論じた。ソールズベリによれば、それまで半世紀の間に道路、鉄道、高架橋、裁判所その他の公共建築には大規模な改善がみられたが、それは英国議会の権限のもとで義務化されたからこそ達成されたのであり、こうした改善こそが「何千人もの困窮者の住宅を撤去した」のであった<sup>26</sup>。2 年後、「労働者階級の住宅に関する王立委員会」の報告書に添付された覚書のひとつにおいて、ソールズベリは、ロンドンへの過剰な人口集中は「国家が自ら招いた結果」であり、「ロンドンに中央政府があるという状況のためである」と述べている。彼は公共建築物と公務員の多さを人口過密の主な要因とみなし、住宅に関する国家の補助金は「施してではなく損害賠償」であると述べた<sup>27</sup>。彼がこの提案を王立委員会で発表したときは一人の委員によってすぐに却下されたが、ソールズベリの考えが 1890 年の労働者階級住宅法において具体化されるほどの共感を得たこともまた事実である。

したがってオクタヴィア・ヒルにとっては、同じ委員会の前で、困窮者たちに国家からの無条件の資金援助を期待させないよう嘆願することが必要だった。ヒルはそのような期待の兆候はすでに見られると語った。

彼らの間に一種の大それた望みが広がっています。彼らは「国家」を税金納付者の集団から切り離された資金をもっている存在としてとらえ、実際に誰かが支払うことなしに物事がなされることがあるという一種のあいまいな概念を持っているのです。国家とは彼らにとっては漠然とした権力です。そして非常に重要なことは、委員の皆さまが何をなさろうと、またどのようなになさろうと、住宅のような生活必需品をどのような値段であれ彼らに提供することが国家の責任であると思わせないような形態にすることです<sup>28</sup>。

ヒルの意見は「国家」がどのように想像されていたかを明らかにしている。そして無条件で救済してくれる独立した資金を持つものとして想像された「国家」は、困窮者たちの自立というゴールにとって深刻な脅威なのであった。この「国家」は住宅改革の効率的な主



催者ではなく、住宅改革の障害であった。人々の頭の中では、国家は人々に委任されて政府の支出に責任を負う代表者の集団ではなく、本人に代わって人々を支える機能をもつ何らかのあいまいな存在であった。ヒルはもし人々が国家を頼りにして政府からの援助を当然のものとみなすようになれば、彼らは自分自身の足で立つための努力をやめてしまうと警告したのである。窮地に陥ったとき、彼らは自分で何とかしようとはせずに、困った者を助けるはずの政府の落ち度だと不平を言うだけになってしまうのではないかと彼女は懸念した。

#### 4. 自由市場原則への信頼

住宅市場への政府の介入に反対していた一方で、オクタヴィア・ヒルは住宅の提供を、最も困窮した人々を対象とした住宅も含めて、民間の建築業者の手に委ねるべきだと主張した。職人階級向けの住宅供給がかつては難しいと思われていたにも関わらず利益を生んだのなら、より貧しい労働者向けの住宅供給も利益を生むだろうというのがヒルの意見であり、実際彼女は自らの住居管理活動においてそれを証明しつつあった。確かに、19世紀末にはかなりの数にのぼる民間の建築業者が職人階級向けの住宅を建築し管理していた。それは借家人たちの収入が多くないにも関わらず、こうした住宅から利益を上げることが可能であるということが周知されていたためである。ヒルが望んでいたのは、より貧しい階級向けの住宅供給が市場化され、慈善団体だけではなく民間の建築会社による住宅の供給で貧しい労働者の需要が満たされることであった<sup>29</sup>。ヒルは自由市場の原則に固執しており、民間の力が試されるまでの間は行動を控えて見守るよう政府に依頼した<sup>30</sup>。しかし彼女の展望は増加の一端をたどっていた公営住宅によって妨げられることになる。市場価格で提供されるよう慎重な注意が払われていたとはいえ、公営住宅の増加は住宅市場を完全な自由競争の場にすることを不可能にした。

需要と供給の原則への確信においてヒルは妥協することはなかったが、困窮者たちの需要の変化に合わせて自らの主張を変えることには柔軟だった。1880年代前半には過密地域の住人を郊外に転居させるという案を日雇い労働者が職を得にくくなるという理由で却下したが<sup>31</sup>、十年後には80年代前半に彼女と同様の考えを持っていた他の人々と同様に意見を変え、高層建築の暗い部屋に住むよりは郊外に住む方を良しとするようになった。1892年には、「安価な交通手段が増えたため、人口を集中させるよりも分散させるよう努めるべきである」と述べている<sup>32</sup>。さらに1900年には「住宅問題の対策として最も有効な手段は、アクセスのよい郊外に住宅を増やすことである」と発言している<sup>33</sup>。ここでは困窮者の需要は（正確にはヒルが困窮者の需要だと思ったものは）、より安価で速い交通手段の発展に伴って変化している。同様に、広いワンルーム住居の提供を薦める方針も世紀末になると変化した。ワンルームの住居の供給が需要を満たしていない状態だったとき、ヒルは貧しい人々の生活様式は居室にも寝室にも使えるワンルームに適しているとし

て、大手の住宅会社が提供する複数部屋からなる住居よりも部屋が一つしかない住居の必要性を訴え続けた<sup>34</sup>。しかし複数の部屋をもつ住居を好みその家賃を払う余裕のある者の数が増えてくると、ヒルはワンルームの住居の増加を求める必要性はなくなったと考えている。困窮者の需要が変化すれば、供給もそれに伴って変わらなければならないのであった。

自ら管理する住居の借家人の需要を理解していると自負していたヒルにとって受け入れ難かったのは、受け取る側の人々が求めているものを供給することであった。需要と供給との食い違いは決して望ましい結果を生むことはないヒルは考えていた。非常に貧しい人々は余分な家具を必要としておらず、最低限必要な設備だけあればよいと彼女はよく主張した。もしこうした人々が設備の充実した部屋を与えられれば、彼らにはその使い方がわからないであろうし、良い状態に維持することもできないだろうと述べている<sup>35</sup>。にもかかわらず、民間の住宅業者も地方政府も労働者階級向けに設備の充実した複数の部屋からなる住居を提供しようとしていた。このような住宅は非常に貧しい人々には設計においても家賃においても適しておらず、彼らを入居させることには失敗していた。ヒルに言わせれば、建築業者は入居させようとしている人々が何を本当に必要としているかに敏感になり、適切な住居を提供することで困窮者のニーズを満たさなければならなかった。そして政府は自由市場に足を踏み入れることなく、譲渡供給の原則が十分に守られているかを見守るべきであった。

## 5. 住宅問題の改善策は希望と活力？

需要と供給の原則への信奉に加えて、オクタヴィア・ヒルの政府の介入に対する強い反対意見の根底にあったのは、住宅問題を希望と活力の欠如とみなす考え方であった。ヒルや彼女に共感していた人々にとって、貧困は所有財産の欠如というよりも個人の自立しようとする意志の欠如の問題であった。住宅問題への国家介入に反対する議論のほとんどはこの点を強調していた。例を挙げれば、「慈善組織化協会」の中央委員会と住居特別委員会で委員仲間であったヒルの考えを支持していたシャフツベリ伯爵は、「もし国家が労働者階級向けの住宅を提供するのみならず、そうした住宅を実際よりも低い賃貸料で提供することになれば、物質的状況は改善されるかもしれないが、労働者階級の道徳的活力を完全に打ち砕いてしまうだろう」と警告している<sup>36</sup>。自立しようとする活力の粉碎や損失は、貧困問題の原因そのものと考えられていた。この意味で、貧困問題は経済的意味での貧困が解消されたとしても解決できないものであった。ここで問題にされていたのは経済力の不足ではなく自立を諦めた大勢の人々の存在であり、彼らがより良い住居を手に入れられないのは希望と活力の欠如のためであって、当時「住宅問題」と呼ばれていたのはまさにこの希望と活力の欠如の問題だったのである<sup>37</sup>。

貧困と諦念とは密接につながっており、貧困の反意語は「富裕」ではなく「希望」であった。この概念はオクタヴィア・ヒルの仲間内でもその外でも認識されていた。ヒルの親しい友

人サミュエル・バーネットが「日本には貧困がない」と断言したとき、彼は明らかに貧困と諦念を結びつけていた。彼は日本滞在中に貧しい人々が「友情に心を動かされて希望を持ち」「苦しさや心配を顔に出さない」のを見てこのような結論に至っている<sup>38</sup>。1883年12月号の『ナインティーンズ・センチュリー』誌上で住宅問題論争に加わったH・O・アーノルド＝フォースターは、「あらゆる改善の望みが事実上排除されるような状況を回避できる機会をその成員全員に一様に与えること」を社会の責務とみなした<sup>39</sup>。人々は貧困から逃れるために常に富を必要とするわけではなく、最優先されるべきは改善の望みを貧しい人々にいかに与えるかであった。

したがってオクタヴィア・ヒルの住居管理の究極の目的も、自立した市民になろうとする望みをすっかり放棄した困窮者の諦念を克服することであった。ヒルにとって住宅問題とは「もっぱら教育の問題」であった<sup>40</sup>。この問題を解決する唯一の方法は、教育を受けていない大勢の人々を指導して、自立しているあるいは自立に向かっているという意識から生じる希望と自尊心をもたせることであった。言い換えれば、ヒルの住宅改革は、家主としての住居管理という手段を通して、人々が自立して自尊心をもつように指導することであった<sup>41</sup>。住宅問題の解決策としての教育の重視はヒル独自のものではない。住宅問題をめぐる1883年の激しい論争に加わった多くの人々は教育の重要性を強調した。『ザ・ビルダー』誌の編集者ジョージ・ゴドウィンが住宅改革の熱心な推進者であったが<sup>42</sup>、同誌の指摘によると住宅問題は「数世代前の大衆の教育の欠如と、そこから必然的に生じる自制および儉約の欠如による不可避の結果」であった<sup>43</sup>。そして住宅問題の「根本的な解決策は、高等教育と、大衆の間に儉約と自尊心を育てることに期待される」とされた<sup>44</sup>。1883年12月に開催された「ロンドンの困窮者の住宅に関する会議」では、チャリティ組織「シティー・ミッション」の主事が「問題全体の根源は貧しい人々の慣習に見出される」と述べ、慣習を変えるよう指導することは「一世代のうちににはできないだろう」と発言している<sup>45</sup>。

ヒルの考えで独特だったのは困窮者たちを指導する方法に関してであった。家主として、彼女は困窮した借家人たちに義務を果たすよう促した。「各自の義務を果たすことは借家人たちにとってあらゆる面で最良の教育だった」とヒルは早くも1866年に述べている。「義務を遂行することで借家人は称賛に値する行いができたという満足感と品位を得ることができ、それは規則のあからさまな厳格さを補って余りある<sup>46</sup>」と彼女は言う。ヒルの借家人たちの第一の義務は自立の努力をすることであり、ヒルはそれを前述のような方法で支援した。職が見つからないときに仕事を与えたり、職のない時期に備えて貯蓄をさせたりという方法で、ヒルは借家人が物乞いに転落してそのために自尊心を失うことを防いだ。自立した市民になるために努力する義務を果たすための具体的な行為のひとつは、家賃を遅滞なく支払うことだった。ヒルは借家人が「住んでいる場所を自分の居場所であると感じ、だからこそ住むための金を払うのだと感じる」ことを望んでいたため、家賃を遅滞なく払うという義務の遂行を重視した<sup>47</sup>。家賃に加えて、ヒルは借家人に地方税も払わ



せようと試みた。借家人の地方税を家主が払い、借家人は毎週の家賃に上乗せする形で家主が払った地方税を返済することを意味する「コンパウンディング」と呼ばれる方法は、ヴィクトリア朝末期のイングランドで広く行われていた<sup>48</sup>。しかしこの方法は、地域社会の成員としての義務を果たしているという自覚を借家人から奪うものであったとも言える。ヒルは1894年にこの点に注目し、「借家人が自ら地方税を納めるように手配する計画の導入」を開始した。これを可能にするため、家賃は低く抑えられた<sup>49</sup>。借家人たちを直接の納税者にしようとするこの試みは、コミュニティの成員であると意識させるためにも、課税額の変化に注意を向けさせるためにも必要だった<sup>50</sup>。後者は借家人たちが経済動向を把握する上でも役立った。

義務を果たして経済的に自立しようとする困窮者たちの意志を維持するためにヒルとその協力者たちが行った仕事はほかにもある。人々の意欲を高めるには、精神的な幸福と健康が促進される必要があった<sup>51</sup>。この目的のためにヒルと入会地保存協会、カール協会、そしてナショナル・トラストの友人たちは、都市の困窮者たちに田園地帯への小旅行や休暇、質のよい音楽や美術、過密地域の緑地であるオープンスペース、日常生活空間に花や絵画を飾ることを楽しむ機会を提供しようと奮闘したのである。これらの試みは人々の生活環境や健康の改善に役立ち、結果として彼らの幸福につながると期待された<sup>52</sup>。レジャーの機会は、困窮者が楽しむ権利を持っているからというだけではなく、絶望と諦めが原因と思われていた貧困問題をそのような機会が直接解決すると信じられていたために提供されたのである。

## 結論

今日の視点から見れば、ヒルの活動は貧民街の問題に対処するには的外れだったように思えるかもしれない。ヒルの活動を理解し、ヴィクトリア時代の社会に与えた影響を理解するには、現在われわれが考える貧困とヴィクトリア時代の人々が貧困問題と捉えていたものが同じではないということを意識しなければならない。多くのヴィクトリア時代の社会改革者が盲目的に貧困を個人の悪徳に起因すると考え公的福祉の必要性に気づいていなかったことは、しばしば批判されてきた。しかしこの視点からはヴィクトリア時代の社会における自立と自主性の重要性の理解が欠落していると言えよう。当時住宅問題に関して緊急に求められていたのは、困窮者たちを経済的に支援する制度ではなく、彼らが自立するための指導であった。この観点からは、オクタヴィア・ヒルの住居管理は住宅問題を直接解決する手段であった。ヴィクトリア時代の住宅問題は、困窮者の住宅の過密した悲惨な状態だけを意味するのではなかった。彼らが住宅の中や外でどのように暮らしているかに関する懸念こそが当時の住宅問題だったのである。したがってヴィクトリア時代の住宅改革運動とは、いかに自立した市民として生きるかについて指導を行う試みであった。ヒルの住居管理はこの種の顕著な事例であり、さらなる研究の価値を有していると言えよう。

註

1. Octavia Hill, "Common Sense and the Dwellings of the Poor," 1883, *Octavia Hill and the Social Housing Debate: Essays and Letters by Octavia Hill*, by Octavia Hill, ed. Robert Whelan (London: IEA Health and Welfare Unit, 1998) 95.
2. Samuel Augustus Barnett, "A Scheme for the Unemployed," *The Nineteenth Century* 24 (1888) 761. バーネットはこの論文で失業者に農作業用地を提供する農業訓練の着想を述べている。
3. Octavia Hill, "Ordering a Spot on God's Earth," 1869, Octavia Hill, *The Befriending Leader: Social Assistance without Dependency. Essays by Octavia Hill*, ed. James L. Payne (Sandpoint, Idaho: Lytton, 1997) 32.
4. Octavia Hill, "An Experiment in Housing the Poor," 1866, Hill, *Befriending Leader* 16; Hill, "Ordering a Spot on God's Earth" 32; "Minutes of Evidence taken before Select Committee" 176.
5. Hill, "Ordering a Spot on God's Earth" 21.
6. Hill, "An Experiment in Housing the Poor" 16.
7. Octavia Hill, "A Landlady of a Different Kind," 1871, Hill, *Befriending Leader* 50-51.
8. Hill, "An Experiment in Housing for the Poor" 16.
9. 同上。
10. Hill, "A Landlady of a Different Kind" 46.
11. ヒルの財政管理については、"Minutes of Evidence taken before the Royal Commission on the Housing of the Working Classes," *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: First Report of the Commissioners on the Housing of the Working Classes [England and Wales] with Minutes of Evidence and Appendix 1884-85. Urban Areas Housing 2.* (Shannon, Ireland: Irish UP, c.1970) 304 を参照。
12. たとえばドルリ＝レイン地区にあった住宅群では、家賃の滞納がなかった者には半年ごとに1週間分の家賃の半分が還付されていた。"Minutes of Evidence taken before Select Committee on Artisans' and Labourers' Dwellings Improvement," *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: Reports from Select Committees on Artisans' and Labourers' Dwellings with Minutes of Evidence, Appendices and Indices 1881-82, Urban Areas Housing 1* (Shannon, Ireland: Irish UP, c.1970) 176.
13. "Minutes of Evidence taken before the Royal Commission" 292.
14. ヴィクトリア時代末期の院外救済に対する批判については、Samuel Augustus Barnett, "Charity versus Outdoor Relief," *The Nineteenth Century* 46 (1899): 818-26 を参照。
15. ヒルは1874年に、「特定の集合住宅や地区では、現状ではどのような団体も個人も克服できないような障害が活動の成功を妨げている」と述べている。Octavia Hill, "Why the Artisans' Dwellings Bill was wanted," 1874, *Homes of the London Poor*, by Octavia Hill (London: Macmillan, 1883), online, U of Virginia Lib., Internet, 17 June 2002.
16. たとえば以下を参照。Hill, "Why the Artisans' Dwellings Bill was Wanted" ; and Octavia Hill, "Our Common Land," 1876, *Our Common Land*, by Octavia Hill (London: Macmillan, 1877) 1-17.
17. William Glazier, "A Workman's Reflections," *The Nineteenth Century* 14 (1883) 958.
18. "Minutes of Evidence taken before the Royal Commission" 304.
19. ブラバゾン卿は「市民の一生をゆりかごから墓場まで面倒を見る」「祖母のような」立法が望ましいと述べている。Brabazon, "Great Cities and Social Reform: I," *The Nineteenth Century* 14 (1883) 800.
20. ヒルは「コミュニティ全体が長年にわたって衛生法を無視し無知であった代償」を「個々の住宅所有者に払わせることはきわめて困難」であると考えたため、その代償をコミュニティ自体に払わせることを否定はしなかった。"Minutes of Evidence taken before the Royal Commission"

303.

21. 法案の段階ではトレンズ法は住宅撤去後に労働者階級向けの住宅を再建する権限を地方政府に与えていたが、この権限の付与は強く反対され 1868 年に法案から消された。Anthony S. Wohl, *The Eternal Slum: Housing and Social Policy in Victorian London*, 1977 (New Brunswick and London: Transaction, 2002) 84-88、および John Nelson Tarn, *Five Per Cent Philanthropy: An Account of Housing in Urban Areas between 1840 and 1914* (Cambridge: Cambridge UP, 1973) 73 を参照。
22. 1885 年の王立委員会では以下のように説明されている—「ロンドンはシティの境界線の外では、首都管理法の下で教区委員会の管轄である 23 の地域と、複数の小規模教区の代表からなる地区委員会の管轄である 15 の地域に分けられて」おり、「これらの教区委員会や地区委員会が有害物撤去法やトレンズ法を施行する地方当局であった」。一方、クロス法の施行担当は首都土木委員会であった。 *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: First Report of the Commissioners on the Housing of the Working Classes* 34.
23. Wohl 73. Tarn 67-81 の Ch.5 “Towards a housing policy: the problems of permissive legislation in health and housing” も参照。
24. Hill, “Common Sense and the Dwellings of the Poor” 101. 1880 年代までには、職人および労働者住宅法の無効性は広く知られていた。たとえば以下を参照。“Conference on the Dwellings of the London Poor,” *The Builder* (1883) 803; *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: First Report of the Commissioners on the Housing of the Working Classes* 16; および Hugh Oakeley Arnold-Forster, “Common Sense and the Dwellings of the Poor, III: The Existing Law,” *The Nineteenth Century* 14 (1883): 949-50.
25. ソールズベリは政府の補助を「一時しのぎ」にすぎないとし、根本的な解決をオクタヴィア・ヒルの手法に見出していたが、「一時しのぎ」の発言が世間を騒がせたのに比べると、ヒルの手法への信頼は注目を浴びなかった。Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil Salisbury, “Labourers’ and Artisans’ Dwellings,” *The National Review* 9 (November 1883), online, U of Virginia Lib., Internet, 17 June, 2002.
26. Salisbury, “Labourers’ and Artisans’ Dwellings.”
27. Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil Salisbury, “Memorandum,” *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: First Report of the Commissioners on the Housing of the Working Classes* 72-73.
28. “Minutes of Evidence taken before the Royal Commission” 292.
29. 自らの住居管理活動のほかにヒルは「イースト・エンド住宅会社」という組織を支援していた。サミュエル・バーネットを含むかつての活動仲間が立ち上げた組織で、民間の建築業者が提供していた労働者向け住宅に入居する人々よりも貧しい人々を入居させるためにかなり安い価格で住宅を提供することを試みていた。この試みは成功せず、1911 年に終わりを迎えた。ヒルは自由市場の原則を遵守しようとした貴重な試みが失敗したのは、地方当局による住宅提供が増加したためだと非難した。Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1898, *Extracts from Octavia Hill’s “Letters to Fellow-Workers” 1864 to 1911*, by Octavia Hill, comp. Elinor Southwood Ouvry (London: Adelphi, 1933) 39; and Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1899, Hill, *Extracts from Octavia Hill’s “Letters to Fellow-Workers”* 41.
30. “Minutes of Evidence taken before the Royal Commission” 299.
31. ヒルが困窮者たちの郊外転居に反対した理由は他にもいくつかあった。“Minutes of Evidence taken before Select Committee” 159 を参照。
32. Octavia Hill, “Blocks of Model Dwellings: (2) Influence on Character,” *Life and Labour of the People in London*, ed. Charles Booth, Vol. 3 (London: Macmillan, 1892) 31.
33. Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1900, Hill, *Extracts from Octavia Hill’s “Letters to Fellow-Workers”* 42.
34. 扇動的な小冊子『見捨てられたロンドンの悲痛の叫び』が発行された後、近親相姦の問題が人々

- の間に恐怖を呼び起こし、ワンルームの住宅は強く批判されるようになったが、ヒルはこの論争にまったく影響されていない様子でワンルームの住宅の提供を訴え続けた。Andrew Mearns, *The Bitter Cry of Outcast London: An Inquiry into the Condition of the Abject Poor* (London: October 1883), online, W. T. Stead Resource Site, Internet, 23 September 2013; Andrew Mearns, “The Outcast Poor, II: Outcast London” *Contemporary Review* 44 (1883): 924-33; W. T. Stead, “Is it Not Time?” *Pall Mall Gazette* (16 October 1883), online, W. T. Stead Resource Site, Internet, 23 September 2013; W. T. Stead, “‘Outcast London’ –Where to Begin,” *Pall Mall Gazette* (23 October 1883), online, W. T. Stead Resource Site, Internet, 23 September 2013; and *Irish University Press Series of British Parliamentary Papers: First Report of the Commissioners on the Housing of the Working Classes* 24-25.
35. たとえば以下を参照。Hill, “Common Sense and the Dwellings of the Poor” 101; Octavia Hill, Preface, *Homes of the London Poor*, online, The Dictionary of Victorian London, Internet, 23 September 2013; および “Minutes of Evidence taken before the Royal Commission” 289.
  36. Anthony Ashley Cooper Shaftesbury, “Common Sense and the Dwellings of the Poor, II: The Mischief of State Aid,” *Nineteenth Century* 14 (1883): 935.
  37. Octavia Hill, “Advice to Fellow-Workers in Edinburgh,” 1902, Hill, *Octavia Hill and the Social Housing Debate* 115.
  38. Samuel Augustus Barnett, “The Poor of the World: India, Japan, and the United States,” *Fortnightly Review* 54 (1893) 218-19. 「イースト・ロンドンの苦悩」と題した論文の中でバーネットは「相対的貧困」を実質的貧困と区別し、前者を十分に収入を得ているにもかかわらず豊かな人々と比較して自分を貧しいと感じている人々の「絶望」と説明している。バーネットはこのような絶望を「貧困の元凶」とであるとする。“Distress in East London,” *The Nineteenth Century* 20 (1886): 687.
  39. Arnold-Forrester 941.
  40. Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1865, Hill, *Octavia Hill and the Social Housing Debate* 3.
  41. ヒルは、「住宅を建てることがわれわれの主な仕事であると感じたことはない」「最も必要だと私が感じてきたのは常に住宅の正しい管理であった」と言っている。Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1907, Hill, *Octavia Hill and the Social Housing Debate* 60. ヒルの活動が高く評価された理由のひとつは、ヒルが「多数の人間を希望と自尊心の喪失によって絶望のふちに落ちることから救った」と考えられたためであった。Brooke Lambert, “The Outcast Poor, I: Esau’s Cry,” *Contemporary Review* 44 (1883): 919.
  42. Wohl 46.
  43. “Lord Salisbury on the Dwellings of the Poor,” *The Builder* (1883):578.
  44. “Dwellings for the Poor,” *The Builder* (1883):773.
  45. “Conference on the Dwellings of the London Poor.” *The Builder* (1883):803.
  46. Hill, “An Experiment in Housing the Poor” 12.
  47. “Minutes of Evidence taken before the Royal Commission” 296.
  48. For “compounding”, see Martin J. Daunton, “Housing,” *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950*, vol. 2 (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 229-31.
  49. Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1894, Hill, *Extracts from Octavia Hill’s “Letters to Fellow-Workers”* 34.
  50. Octavia Hill, “Letter to Fellow-Workers,” 1897, Hill, *Extracts from Octavia Hill’s “Letters to Fellow-Workers”* 38.
  51. See, for example, Henrietta Octavia Barnett, “Passionless Reformers,” *Fortnightly Review* 32 (1882): 226-33.
  52. Brabazon 803.